

〈新刊紹介〉

(価格は税込定価)

田野村忠温著『近代日中新語の諸相』

本書は、近代日中語彙交流およびその関連分野における著者の論考をまとめたものであり、一般語、外国地名、舶来飲食物の名称を例に、それぞれの成立と展開の過程を綿密な調査に基づいて跡付けるとともに、日中両語間の相互影響の様相を解明している。

本書は全5部17章からなる。「序」に続いて「第Ⅰ部 日本語の漢語の文法特性」に「第1章 日本語の漢語の文法的特異性とその中国語への影響」を収め、文法および意味の点から漢語の特性について論じる。「第Ⅱ部 一般語彙」には「第2章 「科学」の語史——漸次的、段階的変貌と普及の様相——」「第3章 「可能」の成立——日中両語間の双方向的影響——」「第4章 「設計」の近現代語史——双方向的影響と文型の拡張——」「第5章 「接種」の語史——種痘関連用語の生成と消長——」「第6章 「化石」の成立と展開——動詞一名詞型漢語としての一般性と特殊性——」「第7章 「電視」の由来——翻訳語研究の盲点——」「第8章 「日本語学」とその関連語——意味と構造の変容——」を収め、一般的な語について論じる。「第Ⅲ部 外国地名」には「第9章 「牛津」「劍橋」の発生と消長」「第10章 真珠湾日中名称史」「第11章 「独逸」成立の過程とその背景——日本語における音訳語漢字表記の特異性——」を収め、外国の地名を表す語を取り上げる。「第Ⅳ部 舶来飲食物名」には「第12章 コーヒーを表す中国語名称の変遷」「第13章 カレーを表す中国語名称の変遷」「第14章 「啤酒」(ビール)の謎の解——この不可解な名称の成立過程——」「第15章 「珈琲」の歴史」「第16章 『増訂華英通語』の「コルリ」(カレー)をめぐる」を収め、西洋由来の飲食物を表す語を取り上げる。「第Ⅴ部 研究資料」には「第17章 言語研究資料としての近代中国地理文献彙集——『海国図志』と『小方壺斎輿地叢鈔』の信頼性——」を収め、当該資料を扱う上での研究上の問題について述べる。末尾に「西洋人名対照表」「後記」「索引(事項索引・語彙索引)」を付す。(川島拓馬)

(2023年7月31日発行 和泉書院刊 A5判横組み 592頁 定価12,100円 ISBN 978-4-7576-1073-6)

前田富祺・岡村真理子著『お菓子の日本語文化史』

本書は、お菓子そのものの歴史ではなくお菓子の「名前」の文化史を事典形式で整理したものである。様々な文字資料から菓子名を拾い上げ、それぞれの語誌を記述している。なお本書は和泉書院の「シリーズ 扉をひらく」の8巻として刊行された。

本書は、冒頭に「口絵」「まえがき」「お菓子の日本語文化史概観(前田富祺)」を収め、次いで個々の菓子名について、その語誌を記載する。収録されている菓子は「アイスクリーム」をはじめとして「かしわもち」「せんべい」「わらびもち」に至るまで、全74

項目に及ぶ。末尾に「引用文献資料一覧」「あとがき」を付す。(川島拓馬)

(2023年9月20日発行 和泉書院刊 A5判横組み 298頁 定価3,850円 ISBN 978-4-7576-1014-9)

沖森卓也・山本真吾編著『日本漢文を読む〔古代編〕』

本書は、上代および中古に成立した日本漢文の様々なジャンルの文章を収録し、その特徴を概観したものである。例文を示し、具体的な文章に接することによって実践的に日本漢文の読解法が習得できるよう工夫が施されている。なお本書は朝倉書店の「日本語ライブラリー」シリーズとして刊行された。

本書の構成は以下のとおりである。「第1部 上代日本漢文篇」には「第1章 総説(山本真吾)」に続いて、「第2章 記紀万葉(沖森卓也)」「第3章 上代漢詩文集 懷風藻(池田幸恵)」「第4章 上代史書・法制書(池田幸恵)」を収め、上代の日本漢文について解説する。「第2部 中古日本漢文篇」には「第5章 漢詩文集(木下綾子)」「第6章 説話(木下綾子)」「第7章 軍記(山本真吾)」「第8章 仏教思想書を読む(宇都宮啓吾)」「第9章 伝記を読む(宇都宮啓吾)」「第10章 紀行文を読む(宇都宮啓吾)」「第11章 古記録・公家日記(原裕)」「第12章 往来物(山本真吾)」「第13章 史書・法制書(原裕)」「第14章 文書(原裕)」を収め、中古の日本漢文について解説する。(川島拓馬)

(2023年10月1日発行 朝倉書店刊 A5判縦組み 160頁 定価3,190円 ISBN 978-4-254-51610-4)

笹原宏之編著『方言漢字事典』

何らかの要素において濃い地域性を具有する漢字を「方言漢字」と呼ぶ。本書は日本の方言漢字を約120字余り選び出し、それらの字体・読み方に加えて、地理的な分布や文化的・社会的背景、歴史、古今の用例等について記述した小型事典である。看板や標識、手書き文字等に見られる方言漢字の写真も多数掲載されている。解説文では、辞書・事典類のみならず、市町村史や地誌、文学書、土地台帳、農学・林学の情報、そしてweb記事やTV番組情報、俗説まで踏まえて記述が行われている。「栃」「阪」「茨」等、地名としてなじみのある漢字も立項されている。

本書の構成は以下の通り。「はじめに」「方言漢字」とは(笹原宏之)」「凡例」「見出し語一覧」「方言漢字事典」「方言漢字地図」「主な参考・引用文献」「音訓索引・部首別索引・総画索引」「写真提供者一覧」。執筆者は、笹原宏之、伊貝秀一、岡墻裕剛、釣持一幸、小林肇、四方佐知子、塚田雅樹、鶴田久美子、西嶋佑太郎、昼間良次、前田春香、山本佳奈。(竹村明日香)

(2023年10月31日発行 研究社刊 四六判縦組み 292頁 定価2,970円 ISBN 978-4-7674-5025-4)

伊藤たかね著『ことばを科学する——理論と実験で考える、新しい言語学入門——』

本書は、著者が東京大学教養学部で開講していた授業内容をまとめたものであり、背

景知識がなくても理解しやすいよう意識して書かれた言語学の入門テキストである。日本語と英語の具体例や実験例を見ながら、言語学の基礎理論とことばを科学的に理解する方法について紹介されている。

本書は全5部14章からなり、「まえがき」に続いて「Part1 イントロダクション」には「第1章 ことばを操る——「気づいていない」のに「知っている」とは?——」「第2章 ことばを理論的に科学する——仮説を立てて検証するとは?——」「第3章 心と脳の働きを調べる——実験研究のための手法——」を収める。「Part2 音の文法」には「第4章 音の異同の認知——音素・異音とその処理——」「第5章 「語」の中の音——日本語のアクセントと連濁——」を収める。「Part3 語の文法」には「第6章 同一語の語形変化——屈折と二重メカニズム——」「第7章 語から別の語を作る——複雑語の構造と処理——」「第8章 語の意味と構文——動詞の意味分解——」を収める。「Part4 文の文法」には「第9章 文の階層構造と二階建ての文——日本語の使役文を中心に——」「第10章 名詞句の移動——受身文の構造と処理——」「第11章 節境界を越えた関係——疑問文の構造を中心に——」を収める。「Part5 ことばの使用の文法」には「第12章 話し手と聞き手の関係——相手はどこにいる? 相手はどう思っている?——」「第13章 世界知識と意味——名詞の特質構造——」を収める。「まとめに代えて」には「第14章 言語の普遍性と多様性——手話から迫る——」を収め、末尾に「索引」を付す。(川島拓馬)

(2023年11月1日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 224頁 定価3,080円 ISBN 978-4-254-51074-4)

小林芳規著『小林芳規著作集 第五巻 文字・表記・音韻』

本著作集全8巻のうちの第5巻に相当するもので、「文字・表記・音韻」を扱った論考を収める。文字と表記についてやや広く扱った論考4篇に続き、平安和文や訓点資料に基いて女手(平仮名)・草仮名・片仮名について考察した論考8篇、古往来や『将門記』等における漢字の振り仮名、訓読、拗音・長音・連濁表記について論じた論考8篇、そして見せ消し符号と『梁塵秘抄』の用語や誤写類型について記した論考2篇を配する。女手に関する論考の中では筆者が専門とする角筆文献についても触れられる。

収録論文は以下の通り(旧字体は新字体に改めた)。「国語学の五十年 文字・表記(史的研究)」「表記の展開と文体の創造」「表記法の変遷」「日本文学史研究の現状と展望」「女手のもう一つの世界——角筆文献における女手使用——」「平仮名の成立と「をんなで」」「平安時代の平仮名文の表記様式〔Ⅰ〕——語の漢字表記を主として——」「平安時代の平仮名文の表記様式〔Ⅱ〕——語の漢字表記を主として——」大東急記念文庫所蔵大方広仏華嚴経卷三十四の草仮名」「文字の交流——片仮名の起源——」「訓点における片仮名の始源とひらかなの使用場面」「かなの用法」「高山寺本古往来における漢字の用法上の性格」「将門記における漢字の用法——和化漢文とその訓読との相関の問題——」「将門記承德点本の仮名遣をめぐって」「訓点における拗音表記の沿革」「漢書楊雄伝天曆二年点における一音節字音の長音化について」「院

政・鎌倉時代における字音の連濁について」「三宝絵の妙達和尚——国語音韻史からの一話題」「心経——発心集増補部の撰者についての国語史よりの提言——」「見せ消し符号について——訓点資料を主として——」「梁塵秘抄の本文と用語」「梁塵秘抄誤写類型一覧」。〔竹村明日香〕
(2024年2月26日発行 汲古書院刊 A5 判縦組み 613頁 定価19,800円 ISBN 978-4-7629-3664-7)

彭飛企画・編集『日中対照言語学研究論文集 第2巻——中国語から見た日本語の特徴、日本語から見た中国語の特徴——』

日中対照言語学に関する34編の論文を収めており、語彙・文法・日本語と中国語教育等、様々なジャンルから日本語と中国語の特徴について解明している。

本書の構成は以下のとおり。まず冒頭の「日中対照言語研究の研究手法と課題——『巻頭言』にかえて——（彭飛）」で、掲載論文をそのテーマ別に6種類に分類する。次いで、以下の通り論文が収録される。「日中の表現スタイルの相違に基づく中国語作文指導の試み（相原里美）」「漢文訓読という言語接触（乾善彦）」「不満表明ストラテジーの使用傾向における日中対照研究——テレビドラマの対照比較から——（于飛、張蕾）」「日本語の「シタコトガアル」と中国語の“V 过”について（王学群）」「中国語と日本語における結果目的語構文の【在N】と【Nニ】の「場所」の考察（王国強）」「脳内時空間の研究——中国語文法“过”“着”との関連——（岡原嗣春）」「中国語“是”の強調について（岡本俊裕）」「中国語における〈不可能〉とモダリティ（勝川裕子）」「“炒酸奶”はなぜ“炒酸奶”なのか——中日両言語の動詞のまとめ方から——（加藤晴子）」「コロケーションの情報を言語教育に生かす試み——「好きだ」と「喜欢」を例に——（古賀悠太郎）」「小説などの日中翻訳の会話文における「のだ」と「(是)...的」の対応形式（下地早智子）」「中日多義構造の言語類型論的考察（盛文忠）」「DICEによる中日漢字同形語の意味や用法の相違に関する計量的考察（施建軍）」「疑問を表す“什么”の意味と機能の考察——日本語の「なに」との比較から——（曹泰和）」「『人間失格』におけるテキストの言語特徴の考察（孫萌、劉曉芳）」「肯定的評価場面での日中言語表現の比較分析——相手が親友の場合——（趙海城、関崎博紀、金庚芬）」「複合格助詞「～について」と中国語の介詞との対照研究——日本語の「について」の多義性を手がかりに——（張晶）」「中国語二音節複合語の「意合」メカニズムの考察（張黎）」「法律領域における日中漢字同形語の意味的相違の考察——「念書」「接見」「嘱託」を中心に——（唐蕾）」「日本語と中国語における一人称及び三人称空項について（馮一峰）」「依頼行動における日本人母語話者と中国人日本語学習者の比較研究（母育新、鄧永璋）」「魯迅「故郷」の4種の中文日訳からみた翻訳論——日中対照表現論の視点から——（藤田昌志）」「日中同形語における二文字漢語の自他性について——VN型の動詞を中心に——（藤原優美）」「現代中国語における〈変化〉事象の捉えかたと構文特徴——〈断続的変化〉と〈連続的変化〉——（古川裕）」「調査報告からみた日本語と中国語の相違の特徴——「新型コロナウイルス感染症関連の日本語表現」「日本語における外来語と和語・漢語（類義語）の使い分け」の理解度・習熟度の調査を通して——（彭飛）」「日本

語の目的語の格マーカー及び中国語との対照形式（馬小兵）」「中国語の動補構造“V 清楚”の用法について——行為の意図・目的・結果との関連において——（丸尾誠）」「中国語動詞「ABAB」と「AABB」重ね型の特徴の考察——能動性と話者の評価の視点から——（苗茨）」「中国語可能表現のメカニズム——“能”と“会”構文を中心に——（安本真弓）」「リアリティの視点からみる中国語受身文の成立条件——日本語との対照を通して——（楊彩虹）」「日本語の「N-がN-をVt」構文のカテゴリー化（姚艷玲）」「往復的移動型「Vてくる」の用法及び機能について——中国語の“来/去”と照らしながら——（楊曉敏）」「創作タスクによる日本語オノマトペのニュアンス学習システム——生成AIによる日中対照研究の可能性——（楊碩，橋本敬，李冠宏，李曉燕）」「コミュニケーションにおける【人称代名詞＋“想”/“看”/“说”】構文の働きの考察——日本語と中国語の人称代名詞の相違を考えて——（楊蕾）」。（川島拓馬）

（2024年2月28日発行 和泉書院刊 A5判横組み 584頁 定価15,400円 ISBN 978-4-7576-1086-6）

京都大学黄氏口義研究会編『抄物を読む——『黄氏口義』提要と注釈——』

林宗二筆の『黄氏口義』(22冊，建仁寺兩足院蔵，1561-1567年抄)を研究対象とする京都大学黄氏口義研究会の輪読成果をまとめたものである。『黄氏口義』は，宋代の詩人・黄庭堅（山谷とも）の詩の抄物である山谷抄の諸本の一つであり，林宗二が複数の先行抄を取り合わせて編纂したゾ体の抄物である。

本書は、『黄氏口義』の提要を記した【第一部】と影印・翻刻注釈の【第二部】に分かれる。「序文——刊行に際しての述懐——（木田章義）」「まえがき（大槻信）」「凡例」に続き【第一部】の「『黄氏口義』提要」には，「1 抄物とは（蔦清行）」「2 『黄氏口義』の原典（緑川英樹）」「3 山谷抄の諸本（蔦清行）」「4 『黄氏口義』に関わる人々（蔦清行）」「5 『黄氏口義』に関わる漢籍（緑川英樹）」「6 『黄氏口義』の言語（山中延之）」「7 参考文献（山中延之）」を収め，抄物及び本資料に関する基礎知識と言語の特徴が整理されている。【第二部】の「影印・翻刻注釈」では，モノクロ画像の影印の後に，「題（木田章義）」「古詩二首上蘇子瞻（其一・江梅）（山中延之）」「古詩二首上蘇子瞻（其二・青松）（蔦清行）」「次韻公沢舅（宇佐美文理）」「贛上食蓮有感（蔦清行）」「送王郎（蔦清行）」の翻刻注解が付く。いずれも山谷詩本文と任淵注の引用の後に，詩型・押韻，現代語訳，本文注を配し，それらに抄文と執筆者による詳細な注釈が続く。「あとがき（大槻信）」の後に「索引」を付す。（竹村明日香）

（2024年2月28日発行 臨川書店刊 菊判縦組み 432頁 定価5,720円 ISBN 978-4-653-04577-9）

奥田俊博著『風土記文字表現研究』

『常陸国風土記』，『播磨国風土記』，『出雲国風土記』，『豊後国風土記』，『肥前国風土記』の五国の風土記を「史籍」として捉え，その文字表現のありようを検討した一書である。本書における文字表現とは，文字の視覚的側面（字体・字形），運用的側面（表記の用法・

方法等)、意味的側面(字義の捨象・拡張・比喩的転換等)をより一般的に捉えた表現を指す。

本書は全11章から成る。「序章 風土記の文字表現——書くことと読むことをめぐる序説として——」の後、「第一章 地名説明記事と地名——『播磨国風土記』を中心に——」では用字と訓みの関係に基いて地名説明記事を類別する。「第二章 『播磨国風土記』の表記——文体との関わり——」では熟字や文体を考察し、『播磨国風土記』が公文の表記・文体を踏まえて編纂されたことを示す。「第三章 『播磨国風土記』の漢語表現」,「第四章 『常陸国風土記』の漢語表現」,「第五章 『豊後国風土記』の漢語表現」,「第六章 『肥前国風土記』の漢語表現」では熟字のありようから各風土記の特性を描き出す。「第七章 『出雲国風土記』の漢語表現——『文選』の受容をめぐって——」では『出雲国風土記』が『文選』の李然注を受容している可能性について指摘する。「第八章 風土記の文体と表記」では風土記における和化漢文・正格漢文への志向について述べる。「第九章 風土記と公文——「史籍」としての風土記——」では和銅官命の「史籍」について検討し、五国の風土記が「史籍」の性質を有することを示す。「終章 公文から古典へ——「史籍」としての文字表現——」の後に「あとがき」と「索引(書名・文献名、人名、語詞、漢語・漢字、事項)」を付す。(竹村明日香)

(2024年2月29日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 256頁 定価7,700円 ISBN 978-4-7629-3687-6)

瀬間正之著『上代漢字文化の受容と変容』

音節構造も語順も異なる古代中国語を書き表すために発明された漢字を用いて、上代ではどのように日本語を表現しようとしたのかという点を追究した一書である。神話や歌謡、書紀の編述に関する論考のほか、百済・新羅など東アジア圏の漢字文化受容に関する論考も収載する。

本書は全2篇17章から成る。「序に代えて」に続き、「第一篇 表記と神話——東アジアの文学世界——」に、「第一章 高句麗・百済・新羅・倭における漢字文化受容」「第二章 〈百済＝倭〉漢字文化圏——音仮字表記を中心に——」「第三章 『古事記』の接続詞「尔」はどこから来たか」「第四章 上代日本敬語表記の諸相——「見」「賜」「奉仕」「仕奉」——」「第五章 文字言語から見た中央と地方——大宝令以前——」「第六章 漢字が変えた日本語——別訓流用・字注訓・字形訓の観点から——」「第七章 高句麗・百済建国神話の変容——古代日本への伝播を通して——」「第八章 歌謡の文字記載」「第九章 清明心の成立とスメラミコト——鏡と鏡銘を中心に——」,以上9章を収める。「第二篇 文字表現と成立——達成された文字表現から成立論へ——」には、「第一章 万葉集卷十六題詞・左注の文字表現」「第二章 『論語』『千字文』の習書木簡から見た『古事記』中巻・下巻の区分」「第三章 藤原宇合の文藻——風土記への関与を中心に——」「第四章 菟道稚郎子は何故怒ったのか——応神二十八年高句麗上表文の「教」字の用法を中心に——」「第五章 欽明紀の編述」「第六章 続・欽明紀の編述」「第

七章『日本書紀』β群の編述順序——神武紀・景行紀の比較から——」「第八章 日本書紀形成論へ向けて」、以上8章を収める。末尾に「後記」と「総合索引〔主要文字資料名・遺跡名・人名・書名・用語・用字〕」「研究者・辞典類・研究機関索引〔近現代〕」を付す。(竹村明日香)

(2024年3月1日発行 花鳥社刊 A5判縦組み 504頁 定価12,100円 ISBN 978-4-909832-87-0)

上代文献を読む会編『東大寺諷誦文稿注解』

2012年から約8年にわたり開催された『東大寺諷誦文稿』の輪読の成果がまとめられた一書である。その緻密な注解は、日本語学・日本文学研究にとどまらず、日本史学、仏教史学にも資するものとなっている。

本書の構成は以下の通り。「口絵〔本文影印〕カラー版80行～122行」「はじめに——『東大寺諷誦文稿注解』の目的と方針——」に続き、「『東大寺諷誦文稿』解説（藤本誠）」にて本資料の研究史、成立年代と執筆者、資料的特質（基本的性格・見出しと内容・抹消とその意味）が記述される。その後、「凡例」に続いて「『東大寺諷誦文稿』注解」が原文1行目から395行目まで詳細に記述される。『東大寺諷誦文稿』本文を数行ごとに区切り、原本の画像、本文加点、訓読、連絡線・抹消・空白等の情報、現代語訳、語釈、補注という順に注解を施す。末尾に、「引用した研究書・研究論文一覧」「引用仏典一覧」「索引 引用仏典索引 事項索引」「あとがき」「執筆担当者一覧表」を付す。執筆者は、藤本誠、井上幸、井ノ口史、岡田高志、影山尚之、桑原祐子、辻憲男、中川ゆかり、根来麻子、村瀬憲夫、宮川久美。(竹村明日香)

(2024年3月15日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 734頁 定価18,700円 ISBN 978-4-7576-1088-0)

日本近代語研究会編『論究日本近代語 第3集』

広義の日本近代語における歴史と構造について、文字・表記、文法、語彙、表現、対照研究等の日本語学的観点から論じた25編の論考が収められている。

構成は以下のとおり。「一チラス・一チラカス考——接尾語的用法の史的展開——（島田泰子）」「ひまわり語彙小考（荒尾禎秀）」「上方・大阪方言の卑罵語オル・ヨルの変化について——中世末期以降の行為指示表現に注目して——（西谷龍二）」「驚流狂言台本忠政本の行為要求表現——虎明本・狂言六義との対照を通して——（八坂尚美）」「近世前期恒常条件の再理解（矢島正浩）」「助動詞の用法記述における「確述」「強意」の史的展開（久保稔子）」「江戸時代後期版本における草書体の漢字列の特徴について——『金花七変化』を中心に——（内田久美子）」「明治期文学作品における「丁寧」と「否定」の文法カテゴリーを含む述語部の構造（許哲）」「大阪版『改正増補英語箋』（卜部氏訳）における『仏語箋』の利用（櫻井豪人）」「2つの『広益熟字典』（今野真二）」「F.エヴラル『日本語教程』（1874年刊）の人称代名詞（岸本恵実）」「若松賤子訳『小公子』の「文末ハ」（栗田岳）」「『尺牘双魚』『行厨集』果品・

穀食語彙の明治期における展開——水晶（スイカ）・仙餌（マンジュウ）を中心に——（園田博文）」「近代日本の中国語会話書における程度副詞の日中対照研究——明治後期を中心に——（金敬玲）」「国定教科書にみる近代の「レル敬語」（高橋圭子・東泉裕子）」「〈ござあます言葉〉と呼ばれる言葉遣いに対する眼差し——「国立国会図書館デジタルコレクション」を利用した調査結果から——（岡田祥平）」「『全国小学児童綴方展覧会』採録植民地期台湾系児童「綴方」における「れる」「られる」使用の諸相（上出大河）」「虚構の中の話し言葉について——虚構度・創作度・脚色度——（安井寿枝）」「言語行為へのローカル文法的アプローチ——日本語の拒否表現をテーマとして——（陳慧玲・劉乙亭）」「格助詞性複合辞の連体用法に関する考察——法律条文を中心に——（丁文静）」「丁寧体過去形式「～だったです」について——「国会会議録検索システム」を例として——（神作晋一）」「応答表現としての「たしかに」の意味・用法（苅宿紀子）」「ビジネスドラマにおける依頼表現——上下関係・話し手の性別・聞き手の性別による影響——（茅桂英）」「少年漫画で使用される技法要素が内包する役割（葉袋優貴）」「頻度を表す副詞の程度性——「十年に一度の」を例に——（櫛橋比早子）」。巻末に「索引」「執筆者一覧」「編集後記」を付す。（川島拓馬）

（2024年3月25日発行 勉誠社刊 A5判横組み 424頁 定価16,500円 ISBN 978-4-585-38523-3）

小田勝著『源氏物語全解説 第一巻 桐壺 帚木 空蟬 夕顔』

日本語学の立場から『源氏物語』の解説を試みた書であり、文法的な説明を与えることに主眼が置かれている。書中では、『源氏物語』の本文引用の後に現代語訳と詳細な解説文を付す。解説文においては日本語文法の研究成果を取り入れつつ、『河海抄』や『花鳥余情』等の古注釈にも目配りした丁寧な記述が行われている。文法だけでなく、語の清濁や文学的解釈についても言及されている。

本書の構成は以下の通り。「第一巻凡例」と「本書の敬語の説明について」に続いて、「第一帖 桐壺」「第二帖 帚木」「第三帖 空蟬」「第四帖 夕顔」を収める。末尾に「あとがき」と「索引（事項・作中和歌索引）」を付す。索引には「清濁音注記一覧」と「難読箇所一覧」をも含む。

本書は「桐壺」から「夕顔」の巻までの内容だが、刊行は「夢浮橋」までの全15巻構成の予定となっている。（竹村明日香）

（2024年3月31日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 608頁 定価9,900円 ISBN 978-4-7576-1095-8）

国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 四十三』

日本語の語彙史を研究する国語語彙史研究会の第43巻目の論文集である。今回の特集テーマは「翻訳」。本特集の関連論文として以下6編を収める。「「大切・御大切」再考——『コンテムツス・ムンヂ』を中心に——（鈴木広光）」「音声の文字化をめぐる（今野真二）」「アルバレス『ラテン文典』のポルトガル語傾斜と、日本イエズス会文法への反映（黒

川茉莉)」「大槻玄沢『重訂解体新書』の訳語作成方法(西嶋佑太郎)」「『波留麻和解』諸本における出典記号(圈符)の種類とその分布(櫻井豪人)」「幕末開国時の条約・古文書に見える漢語「緩優」について(浅野敏彦)」。その他、以下9編の論考も収める。「アカトキ(暁)考(山口佳紀)」「ナゴ[和]・ニコ[和](蜂矢真郷)」「鎌倉時代口語における助動詞リ——明恵関係の問書類を中心に——(岡村弘樹)」「月は青いか——『徒然草』百三十七段——(宮武衛)」「談話の場の新規開始をめぐる——虎明本狂言を中心に——(福沢将樹)」「古本節用集言語進退門所収語彙の典拠と位相(高橋忠彦・高橋久子)」「土佐方言のノ・ガ、準体助詞ガ、推量ロー、理由キニ類の方言史的研究(彦坂佳宣)」「「オネエことば」という語に関する一考——新聞・雑誌記事データベースを材料に——(河野礼実)」「説明的文章における段落と同一語句(尾崎誉治)」。最後に「語彙索引」と「人名・書名・事項索引」を付す。(竹村明日香)

(2024年3月31日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 324頁 定価9,350円 ISBN 978-4-7576-1091-0)

釜田友里江著『日本語会話における自慢・愚痴・自己卑下と共感についての研究——共感が対人関係構築に果たす役割——』

本書は、自慢・愚痴・自己卑下の3つの語りから共感の特徴を明らかにするものである。こうした語りに対して聞き手がとる共感的な反応から考えることにより、どのようなストラテジーを使えば円滑なコミュニケーションが可能となるのかを提案している。

本書の構成は以下のとおり。「第1章 はじめに」「第2章 共感的な反応とは?——これまでの研究における共感発話の特徴——」「第3章 分析の観点と研究方法」「第4章 自慢に対する共感が対人関係構築に果たす役割——自慢の継続に貢献するための共感的な反応——」「第5章 愚痴に対する共感が対人関係構築に果たす役割——愚痴の継続に貢献するための共感的な反応——」「第6章 自己卑下に対する共感が対人関係構築に果たす役割——自己卑下の継続回避のための共感的な反応——」「第7章 「それな」による共感——相手の経験を認めるための方法——」「第8章 おわりに」。(川島拓馬)

(2024年3月31日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 193頁 定価3,520円 ISBN 978-4-87424-968-0)

高良富夫著『音声言語処理入門——図解・音声・動画でわかる——』

音声分析と琉球語の研究を行ってきた著者による音響音声学の入門書である。研究社のWebサイトから音声資料と動画資料をダウンロードでき、それらを視聴しながら読むことで理解を深められる。コラムも多く掲載する。

本書は「Ⅰ 音の物理学」「Ⅱ 音声科学」「Ⅲ 音声工学」「Ⅳ 言語の獲得・学習」の4部構成になっている。Ⅰは「1章 静けさの音と音の大きさ～音が無いとシーンと聞こえるのか～」「2章 音を構成する部品～「音色」は物理的には何なのか～」「3章 スペクトル、そして美しい音とは」の3章構成。Ⅱは「4章 音声生成の仕組み～気管と食道がつながって

る!? おかげで～」 「5章 脳が音色を感じる仕組み」 「6章 音の心理物理学」 「7章 音声の合成による分析～なぜハートは愛 /ai/ なのか～」 の4章構成。Ⅲは「8章 AI がしゃべる人工音声～琉球語もしゃべる～」 「9章 音声自動認識～自分で進化していく機械～」 の2章構成。Ⅳは「10章 言語の獲得～ヒトとサルの違い～」 「11章 言語獲得のモデル～赤ん坊のように聞き話すコンピュータ～」 の2章構成である。末尾に「おわりに」「注」「索引」を付す。(竹村明日香)

(2024年4月29日発行 研究社刊 A5判横組み 282頁 定価3,080円 ISBN 978-4-327-38201-8)

今井邦彦著『言語学はいかにして自然科学たりうるか——今井邦彦言語学講義——』

言語理論と語用論への入門書として、チョムスキーの生成文法やスペルベル&ウィルソンの関連性理論などを穏やかな語り口調で説く。

本書は全5章から成る。「第1章 語用論」では意味とは何かという問いから始め、関連性理論における重要なキーワードを解説しつつ、関連性理論以外の語用論(言語行為理論、グライス理論など)にも言及する。「第2章 生成文法」ではチョムスキーの記述を多数引用しつつ、生成文法について説明が行われる。「第3章 関連性理論と生成文法」では関連性理論と生成文法の間にかなりの差異があることが説かれる。「第4章 認知言語学」では著者の「言語科学は物理学と同じように『経験科学』でなければならない」という立場から認知言語学に対する批判が行われる。「第5章 科学とは何か」では言語科学はいかにあるべきかという点から意見が述べられる。末尾に「索引」を付す。(竹村明日香)

(2024年5月10日発行 大修館書店刊 A5判横組み 248頁 定価3,520円 ISBN 978-4-469-21397-3)

大木一夫・甲田直美編『日本語変異論の現在』

本書は、日本語の変異の一つとしての現代日本語の方言・共通語の現象、歴史的現象を扱った論考34編を収録した論文集である。こうした日本語の変異の構造や類型、社会との関係などの様相を多面的に明らかにしている。本書はひつじ研究叢書〈言語編〉第198巻として刊行され、また小林隆氏(東北大学名誉教授)退職記念論文集も兼ねている。

本書は全6部からなり、「はしがき」に続いて「感謝と恐縮、謝罪の地域差(小林隆)」を冒頭に配する。「Ⅰ 言語変異をとらえる視点」には「とりあわせの手法——記号の関係性と意味——(野林靖彦)」「台湾人日本語学習者の接続詞「なので」の使用——言語の規範をめぐる葛藤——(小針浩樹)」「『生活を伝える方言会話』の持続的活用に向けた語彙調査——設定場面と出現語句に関する定量的記述を軸に——(鯨井綾希)」として、日本語変異を捉えるための全体的な論考を収める。「Ⅱ 日本語の地域的変異」には「東北方言におけるズーズー弁の現在——実相変化の捉え方に関する考察——(大橋純一)」「東北地方北部地域アクセントにおけ

る重起伏調の各種変異について（田中宣廣）」「富山市方言における文末の下降上昇調（小西いずみ）」「文末のコノについて——地理的分布と津軽方言における品詞性を中心として——（田附敏尚）」「山形県方言における ABCB・ABCD 型系統のオノマトペの特徴（川崎めぐみ）」「〈スゲ〉と〈スゲを使った製作物〉に関する語彙の記述的研究——群馬県吾妻郡中之条町六合方言について——（新井小枝子）」「東北地方太平洋側地域における〈玉蜀黍〉の地方語史（作田将三郎）」として、日本語の地域的変種、すなわち日本語方言の研究を配する。「III 日本語地域的変異の類型」には「事態認識と文法的発想の地域差——日本語方言の時間表現を例にして——（津田智史）」「四国方言の格——対格・主格・無助詞の形に注目して——（玉懸元）」「若年層における接尾辞ラヘンの用法拡張の地域差（佐藤亜実）」「驚きの感動詞ジャの類（竹田晃子）」「子どもを楽しませるあやしことばの東西差——わらべ歌詞章を手掛かりに——（椎名渉子）」「方言から日本語の「よろしく」を考える（櫛引祐希子）」「『先取り発話』の使用と地域差——大阪と東京の若年層女性の雑談の比較から——（太田有紀）」として、日本語方言の類型論を配する。「IV 日本語の歴史的変異」には「平安鎌倉時代の助数詞「遍」「返」「反」「度」——今昔物語集と続古事談を中心に——（勝田耕起）」「奈良・平安・鎌倉時代の和文作品における感情形容詞の使用実態（安本真弓）」「動詞間における係助詞の介入と複合動詞（百留康晴）」「漢語副詞「徐々に」の成立と定着（鳴海伸一）」「『雑文穿袋』食物・時令佳節項目と『尺牘双鱼』——尺牘資料の日本語への影響に関する一考察——（園田博文）」「近世江戸語終助詞の承接による体系と終助詞の意味（黄孝善）」「謙讓語における制約の成立と機能・用法拡大——働きかけのあり方と補語配慮——（伊藤博美）」「日本における漢字「吊・吊」の「つる」意の出現（山下真里）」として、日本語史に関わる論考を収める。「V 標準的な日本語変異」には「数詞に直接後続する要素の助数詞性／名詞性——名詞の副詞化と文法化——（北原博雄）」「程度修飾・数量修飾と事象の終了との関与について（蔡薰婕）」「語構成と句構成に関する日中対照研究——字音形式「感」を通して——（曾睿）」として、現代日本語の共通語の変異を扱った論考を収める。「VI 言語変異と社会・教育」には「方言研究と企業との連携——群馬県における俚言オンカの調査を介した社会貢献——（佐藤高司）」「国語教育と方言研究——藤原与一の理論的体系に関して——（吉田雅昭）」「在米日本人2世の談話展開の方法——日本在住の若年層話者との比較をとおして——（琴鐘愛）」「日韓の言語景観研究の新しいパラダイム——歴史社会言語学的方法と関連事例を中心として——（梁敏鎬）」「台湾における中国語の昼の出会いのあいさつ表現の定型性（中西太郎）」として、日本語変異と社会との関係に関わる論考を収める。末尾に「あとがき」「執筆者一覧」を付す。（川島拓馬）

（2024年5月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 614頁 定価13,750円 ISBN 978-4-8234-1186-1）

石黒圭・吉甜・佐野彩子編『スマホは辞書になりうるか——日本語学習者の辞書引きの困難点と指導法——』

本書は、日本語学習者の辞書探索行動を収集・分析し、学習者のスマホによる辞書使

用の実態を明らかにしたものである。デジタルデバイスを使った語学学習・辞書使用に見られる問題点を知ることで、学習者のつまづきを減らしていく方法について考察されている。

本書の構成は以下のとおり。冒頭に「はじめに 本書の目的（石黒圭）」を配する。次いで本論は次の13章からなる。「序章 学習者はどのように言葉を検索するのか——辞書使用の適切な指導のために——（石黒圭）」「第1章 学習者は辞書検索の何が難しいのか——韓国の初級・中級の学習者の検索内容より——（朴恵煥）」「第2章 学習者の検索目的はなぜ達成できなかったのか——韓国の中級・上級の学習者を中心に——（曹英南）」「第3章 学習者はなぜ単独検索を行うのか——ベトナムの初級・中級学習者の事例を通して——（LAI THANH HOA・VU THI TAM DAN）」「第4章 同じ学習歴の学習者になぜ日本語レベルの差が生じるのか——中国語話者の語彙検索行動を手掛かりに——（袁建華）」「第5章 学習者はなぜ連続検索を行うのか——台湾の中級・上級学習者の事例を通して——（喬曉筠）」「第6章 語彙知識を深めるにはどのように検索すればよいか——マカオの初級の学習者を対象に——（李羽喆）」「第7章 学習者が外来語を検索するときの問題点は何か（呉梅）」「第8章 学習者が母語で検索するとどのような困難が生じるか——ドイツの学習者を中心に——（佐藤杏奈）」「第9章 なぜ中国語話者は漢語を検索するのか（吉甜）」「第10章 どうすればローマ字入力で検索語にたどり着けるのか（DAO THI NGUYEN・LAI THANH HOA）」「第11章 どう入力すれば漢字検索で検索語にたどり着けるのか（佐野彩子・吉甜・佐藤杏奈・大船ちさと）」「第12章 どのように機械翻訳を利用すれば日本語学習に役立つのか——学習者による機械翻訳の利用事例からの一考察——（佐野彩子）」。末尾に「おわりに（佐野彩子・吉甜）」を付す。（川島拓馬）

（2024年5月20日発行 明治書院刊 A5判横組み 248頁 定価5,500円 ISBN 978-4-625-43455-6）

遠藤織枝著『やさしい日本語の時代に、やさしい介護のことばを』

介護の現場では「褥瘡」「心窩部」「側臥位」などの難解な漢語が今も多用されている。非漢字文化圏から来た人々にどのように介護のことばを教えるべきかという課題に取り組んだ著者が、近代から現代までの介護のことばの変遷を追った一書である。現代の介護士養成テキストや国家試験問題に見える用語を、明治・大正期の医学辞書や看護婦用字引類、国語辞書と対照させて、語形や意味の変遷及び継承過程についてわかりやすく説明する。明治期の用語が現在に至るまで使用されていること、医学や看護学の用語が介護のことばに流用されたこと、昭和初期に医学用語を平易化する動きがあったことなどを記し、随所でわかりやすい言葉への転換を促す。

本書は全十二章からなる。「第一章 「シュシ」ですか、「テユビ」ですか。——コロナ時代のことば——」「第二章 人体図の名称が難しいのは」「第三章 難しい体の名称（一）「^{しやしょう}手掌」「手背」「足背」「足底」」「第四章 難しい体の名称（二）「心窩部・みぞおち」

と「腋窩・腋下・脇の下」「第五章 難しい体の名称 (三)「上肢」「下肢」「第六章 「褥瘡」「第七章 「仰臥位」「側臥位」「腹臥位」「第八章 「湿布」「貼付」「塗布」「第九章 「臥床」と「汚染」「第十章 「清拭」の歴史」「第十一章 用語平易化・標準化の歴史」「第十二章 専門のことばをわかりやすくするための試み」,最後に「参考文献」「あとがき」「索引」を付す。(竹村明日香)

(2024 年 5 月 21 日発行 ひつじ書房刊 四六判縦組み 320 頁 定価 2,860 円 ISBN 978-4-8234-1213-4)

湯沢質幸著『日本人は漢文をどう読んだか——直読から訓読へ——』

漢文の読み方には中国から渡来した中国音で読む〈直読〉と、平安時代に生まれた、日本語で読む〈訓読〉の二種類が存在するが、〈直読〉は消え、全面的に〈訓読〉のみが行われるようになった。本書では、〈直読〉から〈訓読〉への歴史的変化について考察が行われ、日本人の漢字漢文受容の歴史を描き出している。

本書は全 8 章からなる。構成は以下のとおりである。「本書の目的」に続き、「第一章 直読と訓読——現代と平安時代——」「第二章 平安時代儒学界の直読と訓読——『宇津保物語』と『北山抄』『江家次第』——」「第三章 〈直読から訓読へ〉——直読の衰退——」「第四章 平安時代の訓読——『白氏文集』——」「第五章 『宇津保物語』併存の再検討」「第六章 平安時代儒学界と直読」「第七章 儒学界と仏教界」「第八章 〈直読から訓読へ〉の周辺」。末尾に「結語」「後記」を付す。(川島拓馬)

(2024 年 5 月 25 日発行 勉誠社刊 四六判縦組み 240 頁 定価 3,520 円 ISBN 978-4-585-38006-1)

廣瀬幸生著『自分の言語学——ことばの主体性のありか——』

本書は日本語と英語を比較対照しながら、ことばの主体性について考察したものである。話し手を私的自己と公的自己に解体し、言語の自己中心性のありかを突きとめる話し手解体論と、言語使用は状況把握、状況報告、対人関係の三層に分かれ、言語によって三層関係が異なるとする三層モデル論からなる。

本書の構成は以下のとおり。冒頭に「まえがき」に続いて「序章 ことばの主体性に関する意味・語用論的対照研究——話し手解体論と三層モデル論——」を配する。次いで「第Ⅰ部 話し手解体論」には「第 1 章 話し手の解体——公的自己と私的自己——」「第 2 章 言語表現と公的性——他者をどれくらい意識するか——」「第 3 章 話し手と他者の間——客体的自己と視点階層——」「第 4 章 英語再帰代名詞の視点的用法——対比から視点へ——」「第 5 章 話し手から状況の主体へ——再帰の「自分」とその関連表現——」を収める。「第Ⅱ部 三層モデル論」には「第 6 章 言語使用の三層モデル——文法と語用論の関係を捉える——」「第 7 章 デフォルト志向性の解除——三層関係が変わるとき——」「第 8 章 主観的把握と客観的把握——私的自己中心か公的自己中心か——」「第 9 章 時間のメタファーと主観性——日英語の違いを三層モデルで捉える——」「第 10 章 あいまいなのは日本語か、英語か?——三層モデルから見た「何

を言わないか」の言語学——」「第11章 主観の客体化——他者の思いをどのように受け止め、伝えるか——」を収める。末尾に「あとがき」「索引」を付す。(川島拓馬)

(2024年5月27日発行 開拓社刊 A5判横組み 376頁 定価5,500円 ISBN 978-4-7589-2402-3)

斎藤倫明・修徳健編『談話・文章・テキストの一まとまり性』

本書は、2021年12月に開催された中国海洋大学オンライン国際シンポジウム「文章・談話の一まとまり性をめぐって」を基に、「談話・文章・テキスト」に関する様々な論考を収録した論文集である。

本書の構成は以下のとおりである。「まえがき」に続いて「第Ⅰ部 書き言葉を中心とする文章・テキストの特性と一まとまり性」には「接続詞の統語論(庵功雄)」「説明的文章における「のだ」文を手がかりとしたテキストの「一まとまり性」について——「ことだ」「ものだ」「わけだ」との連携をめぐって——(立川和美)」「日本語の説明文・意見文・歴史文における談話終結表現——日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較——(俵山雄司)」「児童作文における会話文の展開(宮城信)」。「第Ⅱ部 話し言葉を中心とする談話・テキストの特性と一まとまり性」には「話し言葉における非流暢性と談話標識(甲田直美)」「会話におけるまとまりについて——「話題」および「テキスト構成語」との関係性を中心に——(高崎みどり)」「発話の産出過程と一まとまり性(丸山岳彦)」「雑談のCan-Do化を目指した話題の類型の分析——「食べること」を例として——(中俣尚己)」。「第Ⅲ部 文章・テキストの一まとまり性への新たなアプローチ」には「手話・指点字にみるテキストの一まとまり性(坊農真弓)」「日本語の物語テキストにおけるまとまり性とマルチモダリティ(野村眞木夫)」「単位語の計量分析に基づく文章の一まとまり性(鯨井綾希)」。「第Ⅳ部 言語単位と文章の一まとまり性」には「言語表現の「成り上がり」について——文章を単位として見なすことは可能か?——(揚妻祐樹)」「文章の単位性について——言語単位論の観点から——(斎藤倫明)」。末尾に「索引」を付す。(川島拓馬)

(2024年5月31日発行 和泉書院刊 A5判横組み 320頁 定価9,350円 ISBN 978-4-7576-1098-9)